

# 山形県における夏まきレタスの品種とは種期について

鈴木 洋・岡崎 幸吉

(山形県農試)

## 1. ま え が き

山形県の主要秋作野菜であるハクサイに、1958年頃より根瘤病が発生し、その後年々増加の傾向にあるが、激発地帯に対する防除対策が確実でないために、その代替野菜として根瘤病の全然発生しないレタスが、山形市平坦地に導入されつつあるので、夏まき秋どり用の品種の選抜と、その播種適期を知る目的で1965年に本試験を実施した。

## 2. 試 験 方 法

### 1. 品 種

品種は、第1表に示すように夏まき秋どり用として各地で使用されている代表的な4品種、グレートレーク54、グレートレーク366、グレートレーク659、オリンピックヤを供試した。グレートレーク366及び359は、横浜植木KKの種子を使用、7月15日、7月26日の2回播種したが、種子不良のためにグレートレーク659は全然発芽しなかった。このため8月5日、8月14日には、グレートレーク659はタキイ種苗KK、グレートレーク366は坂田種苗KKのものをそれぞれ使用した。

### 2. 栽 培

播種期は、前年度の試作結果から考え、7月15日、7月26日、8月14日の4回とし、それぞれ直まきを行なった。

レタスは、品種により草勢、球張りなどが異なることから、その品種の標準栽培密度をとったので、供試面積及び株数が異なり第2表に示すとおりである。

施肥量は、10a当り分量で、N 26.8kg, P<sub>2</sub>O<sub>5</sub> 14.5kg, K<sub>2</sub>O 20.5kgとし、その60%を元肥に施し残りを20%づつ2回追肥をおこなった。

### 3. 試験結果及び考察

レタス夏まき栽培で最大の問題は、高温の影響による早期抽苔の発生であるが、播種期による抽苔率の変化を見たのが第3表である。

これによると、やはり播種期の早いものほど高温の影響で抽苔率が高く、播種期の遅い8月5日以降では、各品

第1表 供試品種と播種期

品 種	播 種 期			
	15/7	26/7	5/8	14/8
グレートレーク 54	○ (横 浜)	○ (横 浜)	○ (横 浜)	○ (横 浜)
〃 366	○ (横 浜)	○ (横 浜)	○ (サカタ)	○ (サカタ)
〃 659	○ (横 浜)	○ (横 浜)	○ (タキイ)	○ (タキイ)
オ リ ン ピ ヤ	○ (みかど)	○ (みかど)	○ (みかど)	○ (みかど)

第2表 栽 培 条 件

品 種	1区当り		畦巾×株間	10a当り株数
	面積	株数		
グレートレーク各系統	24m <sup>2</sup>	136株	100×35cm 2条まき	5,714
オ リ ン ピ ヤ	18	193	75×25cm 2条まき	10,666

第3表 播種期と抽苔率(%)

品 種	播種期	15/7	26/7	5/8	14/8
		グレートレーク 54	92.6	19.8	0.0
〃 366	73.6	8.8	0.0	0.0	
〃 659	未発芽	未発芽	0.0	0.0	
オ リ ン ピ ヤ	5.2	8.3	0.0	0.0	

種とも全然抽苔しない。これを品種別にみると、7月15日播種ではグレートレーク54は92.5%、グレートレーク366は73.5%の高率である。これに対して、オリンピックヤは5.2%と低率である。したがって、早まきした場合でもオリンピックヤは抽苔率が少なく安全な品種であることが認められた。なお、グレートレーク659は、7月15日、7月26日まきの場合には不発芽であり抽苔率は不明である。

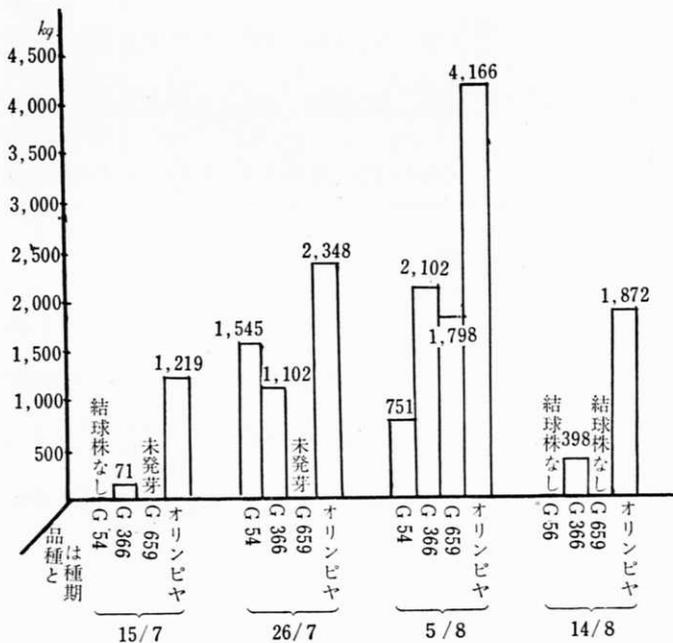
次に、播種期ごとの結球株の調整個重をみたのが第4表である。

各品種とも、播種期により結球株の調整個重がかなり異なるが全期間平均した場合、グレートレーク系統は、1個重が、380g～480g位の玉になるが、オリンピックヤ

第4表 結球株の調整個重 (g)

品 種	播種期	15/7	26/7	5/8	14/8	平 均
グレートレーク	54	△	381 (25/10~13/11)	379 (13/11~19/11)	△	380
〃	366	432 (13/10)	370 (25/10~13/11)	509 (13/11~19/11)	233 (24/11~)	410
〃	659	×	×	478 (13/11~19/11)	△	478
オリンピヤ		151 (11/9)	294 (13/10~13/11)	453 (19/11~19/11)	288 (19/11~)	303

( )内は収穫時期 △は結球株なし ×は未発芽



第1図 播種期と収量 (10a 当り)

は 300g 位の小球である。しかし、もっとも結球条件のよい8月5日は種では 450g とグレートレーク並みの玉となることが認められた。

播種期による収量の変化をみたのが第1図である。

各品種とも、播種期により結球株の収量がかなり異なる。すなわち、7月15日の早期播種では、グレートレークの各系統は抽苔が多いために収量が少なく経営的には問題がある。

オリンピヤの場合、7月26日播種が10a 当り 2,348kg の収量を得たが、結球株を剥皮してみると、内部抽苔しているものも混入し品質はあまり良好とはいえない。播種期の遅い8月5日播種では、グレートレーク系統は生育が遅く、秋季低温のため完全結球しないうちに霜又は降雪となり玉が傷み、軟球なら別であるが玉しまりのよいものを年内どりすることは困難である。オリンピヤも11月下旬に10a 当り 1,872kg を得たが、玉しまりはあまり

第5表 気象表 (1965年)

月	旬	気 温			雨 量 mm
		平 均 ℃	最 高 ℃	最 低 ℃	
7	上	21.4	25.3	17.6	64.1 137.9 38.6
	中	22.5	26.0	19.0	
	下	23.1	27.5	18.8	
8	上	26.3	32.5	20.1	0.5 19.3 42.5
	中	25.5	31.6	19.4	
	下	25.4	31.6	19.2	
9	上	19.8	22.1	17.4	21.8 64.0 12.2
	中	21.0	25.4	16.6	
	下	18.1	23.4	12.7	
10	上	13.9	20.2	7.6	1.6 16.7 18.0
	中	13.2	18.2	8.1	
	下	11.0	17.8	4.2	
11	上	9.3	13.0	6.0	41.9 27.8 36.3
	中	6.2	11.1	1.2	
	下	6.0	11.6	0.3	

よくなかった。やはり、8月5日播種のオリンピヤが、4,166kg の多収を占めしかも玉しまりのよいことが確認された。

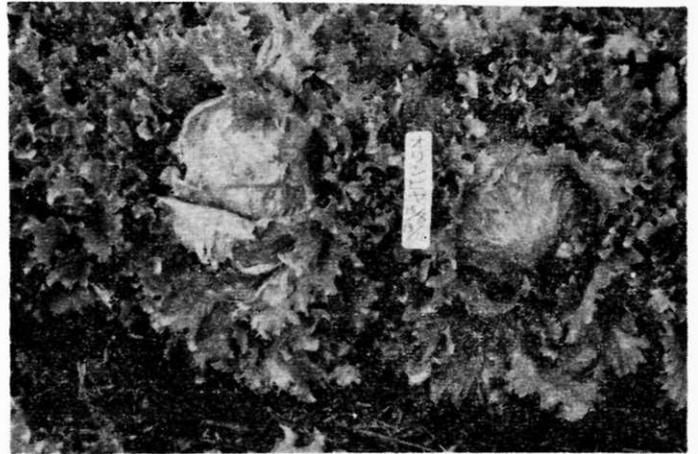
以上のような試験結果からみて、山形県のように夏季高温が継続し、しかも、秋季急激に低温霜下となる条件の地帯における夏まき秋どり用の品種としては、オリンピヤが適当と思われ、その播種期は、本試験の範囲では8月5日ごろと思われ、その収穫期は11月中旬(積算温度で1700~1800℃)である。

オリンピヤの特性概要は次のとおりである。

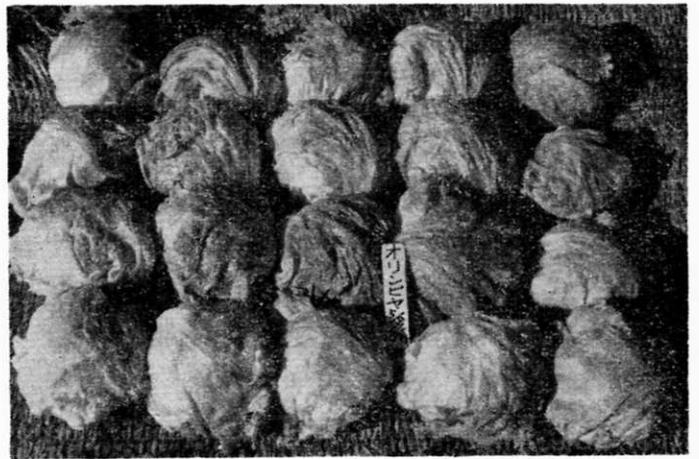
草勢はグレートレーク系よりやや弱く、葉色が薄く黄緑色を呈する。球形は扁円で、玉揃いはグレートレーク系並みでありよきとは云えないが出荷上困るほどでもない。極くわずかであるが茶紫色の異株が混入する場合



第2図 「オリンピヤ」の結球初期の生育  
(8月5日播種区)



第3図 収穫直前の「オリンピヤ」  
8月15日は種  
11月13日撮影



第4図 「オリンピヤ」の結球状態  
8月5日播種  
11月4日撮影

もある。抽苔におよぼす温度感応が鋭く、耐暑性が強いことから、夏まきの場合には栽培しやすい品種である。割合に小球なので、10a当り10 000株前後の密植栽培としなければ増収が望めないことから移植よりも直まき型の品種と云えよう。直まきの場合の最大問題は高温乾燥による発芽不良であるが、覆土後、ムシロ、ワラを被覆

すれば容易に発芽する。

なお、オリンピヤは正式な品種名ではなく、みかど育種農場(千葉県千葉市星久喜町1203番地)が米国より輸入しているものである。